

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：14701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730751

研究課題名(和文)生活基盤型保育における知的教育の研究 造形の遊びから学力を可視化する

研究課題名(英文)Research of the Intellectual Education in Life Based Early Childhood Education Art

研究代表者

丁子 かおる(CHOJI, Kaoru)

和歌山大学・教育学部・准教授

研究者番号：80369694

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：保幼小の造形活動における材料用具のカリキュラム、指導(使用)開始時期、保育者の保幼小連携への意識調査を大阪市内と北九州市内の全保育施設を対象に行った。幼小の校種間で意識の差があること、保育現場でも急ぎすぎた指導の可能性があることなどが明確になった。また、小学校教育における国語や算数といった教科と幼児教育における造形活動との関連を示すために、造形の遊び場面が教科学習に繋がっていると思われる場面などを調査し、学習指導要領から各教科の学習単元のもとになる活動、重なる活動の割合をグラフに数値化した。幼児の造形活動が知的教科の初期の概念をつくる活動となっていることが証明できた。

研究成果の概要(英文)：I researched opinion poll and curriculums of the instruction material and tools in preschools(kindergaerten)in Osaka and Kitakyushu, that child Art activities to connect education from pre school to elementary school .It became clear that there is a difference of consciousness between preschool teachers and elementary school teachers, and there is possibility of instruction hurried too much at preschools.I reserched the scene where it seemed that the art activities of young children related with subjects and early childhood education in elementary education.
It make clear the rate of the activity which becomes a basis of the study unit of each subject from the government guidelines for teaching and which works and overlaps was evaluated in the graph.It has proved that the art activities of young childrens are builds the concept in early stages of an intellectual subjects

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：幼小接続 造形 知的共育 幼児教育 小学校 保育 カリキュラム 経験

1. 研究開始当初の背景

近年、低年齢児から英語や体操といった教室に熱心に通わせる親、保育施設でも、文字や英語の指導、保育における科学的思考をキーワードにした本が米国より紹介されるなど、日本の幼児教育において知的教育に関心が高まっている。しかしながら、日本における幼児教育は総合的に行われる生活基盤型の保育であり、幼児期の発達に適した教育・保育課程において学びを培うものであるため、幼児の知的な学びは一般的には理解されづらく、小学校での教科指導と同じ内容を幼児に楽しく指導するなど、誤ってとらえられることがある。

また、多様な保育が展開される日本では、知的教育へのニーズはあるものの生活基盤型の保育で総合的に人格形成を進めているので、知的教育に焦点を絞りにくい。そのため、保幼小連携が推進されている現状において研究は始まったばかりで少ないか、または、成果はどちらかの視点に偏りすぎてしまうことがある。それには、保幼小連携を進める上でも、両輪として進められるべき学びと発達という観点が十分に理解されず、例えば、学びをつなげたい小学校の教員と、子どもの発達をつなげたい幼児教育の保育者間で、話し合いは、まとまりにくい現状がある。未だ、国内では子ども主体の遊びから知的教育に焦点を当てた研究の事例は未だ少ないといえよう。

2. 研究の目的

以上のような経緯から、文字の読み書きに代表される小学校の教科学習をそのまま幼児に提供するのではなく、幼児教育の学びに焦点を当て、現行の幼児教育の学びが小学校の教科学習の土台を育む経験にもなっていることを示すことで、保幼小接続のための理解を促進する。研究の範囲として、ここでは幼児教育における造形活動に関わる活動の内容や過程、教育課程に限定する。造形の活動は、領域「表現」において特記されることが多いが、実際には、グループで活動をして「人間関係」の育ちをねらいにしたり、砂や水などを扱って領域「環境」とも密接であったりと、総合的に行われている。本課題では、造形活動を見直し、改めて着目することによって、低年齢児における新たな知的教育の視点を提案する。

3. 研究の方法

本研究では、1) 造形活動に関わる材料用具を扱い始める平均的年齢と、保育者の幼小連携への意識について状況について保育現場を中心に調査し、現状理解を行う。2) 造形活動の過程の中で絵やつくったものを互いにみあって思考する鑑賞活動について調査を行う。幼児の鑑賞では、日常でお互いに絵をみたり一緒に制作したりする場面はよくみられるが、みんなの前で話すことにのみ主眼が置かれがちである。そこで、より効果的な幼児の鑑賞の方法を模索するために実践的な調査を行う。3) 知的教育について小学校における国語、算数、生活、理科、社会の5教科と、幼児の造形活動の学びや活動の関連について、学習指導要領の各単元をもとに調査をする。調査結果はグラフ化し、また、教科ごとに関わりの強い遊びを抽出し、教科ごとの関連について特徴をまとめる。

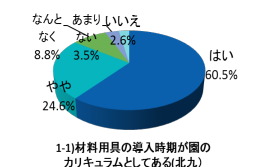
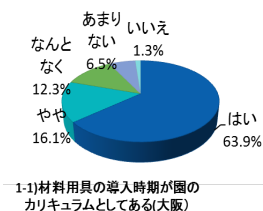
本研究では、子どもの造形活動において、子どもたちが単に制作するのみではなく、様々な学びの過程をもっていることに注目する。例えば、導入時には、子どもたちは、保育者の話を主体的に聞いたり、グループで話し合って意見を出しあってイメージを広げたり、材料用具の扱い方を知って試すなどを行う。また、活動によっては、図鑑を調べたり、協働で問題を解決したり、材料を準備したり片づけたりするなど、制作や話し合いといった様々な場面がある。

幼児・児童の思考は具体的な事物を用いて思考を深め、その後、抽象概念を扱えるようになるという発達の特徴があるため、日常的に物と関わる造形は、子どもの思考に大きな影響を与えると考え、対象とする。

4. 研究成果

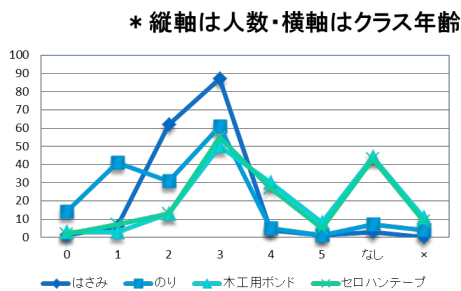
(1) 材料用具のカリキュラム調査

幼児教育現場の材料用具の使用状況について現状を理解するため調査を行った。北九州市及び大阪市内の幼稚園・保育所を対象に材料と用具



に関するアンケート調査を行った。大阪市内幼稚園及び保育所から 165 園の回答（回収率 21.9%）と、北九州市内幼稚園及び保育所から 108 園の回答（回収率 43.0%）があった。

「問. 材料用具の導入時期がカリキュラムにあるか」では、幼児教育において、どのような遊びをいつごろ行うのかは、子どもの様子を見ながら、随時変更し適応させていくが、8 割以上の園で教育課程、保育課程としても大まかに材料用具についてのカリキュラムがあることが分かった。



平均年齢（0 歳クラス平均を 0.5 歳と計算）また、各材料用具の使用について使用し始める時期について表にした。例えば、材料用具を使い始める時期についても、上図のような平均的なデータを得た。子どもにとってはじめて「つくる」ための用具としてはさみ、のり木工用ボンドとセロハンテープの使用については、大阪も北九州も 3 歳クラスをピークにして教えて始めていることが分かる。これをみれば分かるように、かなり低年齢から実際には使用をしている。

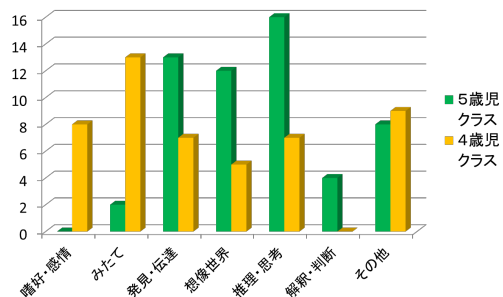
ただし、参考までに佐賀市 K 小学校小学校教員でアンケートをとった結果と、先のデータを比較してみた。ここで挙げられた項目については、4 か月～1 歳程度遅く、

材料または用具	大阪市内平均年齢(歳)	北九州市内平均年齢(歳)	材料または用具	大阪市内平均年齢(歳)	北九州市内平均年齢(歳)
はさみ	3.1	2.8	折り紙	2.8	2.8
のり	2.5	2.9	和紙(障子紙・扇画用和紙等)	3.6	3.6
木工用ボンド	3.7	4.0	新聞紙	2.1	2.4
セロハンテープ	3.5	3.6	ビニール	2.8	2.8
指絵の具	2.3	2.6	空き箱	2.8	2.9
溶き絵の具*	2.7	2.9	ダンボール	2.8	3.0
パレット	4.3	4.5	自然素材	2.6	2.8
筆	3.3	3.4	小麦粉粘土	1.8	2.0
パス	2.5	2.6	油粘土	2.9	3.0
クレヨン	2.6	2.3	紙粘土	3.2	3.5
鉛筆	4.2	4.2			
水性ペン	2.9	3.3			

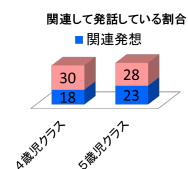
1. 材料用具	2. 就学前に使用していると想定	3. 小学校調査での教員の想定	4. 幼保調査との差	5. 使用年齢は分からない
はさみ	87.0%	3.8歳	+1.0歳	34.8%
のり	100.0%	3.3歳	+0.8歳	39.1%
パス	91.3%	2.9歳	+0.4歳	43.5%
空き箱	87.0%	3.5歳	+0.7歳	34.8%
油粘土	78.3%	3.5歳	+0.6歳	39.1%

小学校教員は低年齢児が使用を開始していると想定していた。加えて、約 3 割が想定すらできない、分からないと答えていることも注目したい。つまり、幼小接続といった場合に、学校や園全体で子どもを育てと考えれば、保育者の意識は高く、小学校教員は、幼小間で接続への意識は個人差が大きい。しかしながら、どちらも研修などで理解したいという意見も多数あった。

(2) 幼児の鑑賞による発話の分析調査



4 歳と 5 歳クラスによる発話ポイントの内容分類と比較を行った。子どもの発話を 1 文ずつに分け、内容ごとに文の数で分類し、数値化したところ、5 歳は、絵をみて子どもの言葉を聞いて伝え、創造し、その関連から推測を深める発話が 4 歳よりも多くみられた。4 歳は のようだ！と自分なりに考えて伝えて喜ぶ姿が 5 歳児よりも多かった。年齢に応じた鑑賞は、幼児の発話を促し、思考を促す機会となる。また、幼児は主観的であるため、友達の話を聞かないといわれるが、この活動の場面では、友達の意見を聞いて推測したり反論したり同意したりなど関連して話をする姿が多く見られた。図で示したように全発話数のうち、4 歳は 37.5%で、5 歳は 45.1%で関連して発想をしたり意見を言ったりしていた。作品をみんなでみる鑑賞は幼児なりに友達の話に耳を傾けて自分の想像を広げられる楽しい学びの手法となる。このように造形に関わって友達や保育者と対話したり、それを元に思考したりすることは、未分化な幼児にとって総合的な活動となるので分かりやすい。



生活科は、9項目中すべてで直接、間接的に関わりがとても多い。幼小をつなぐ教科であることが改めて分かる。遊びでは、お散歩、探検、遠足から造形、園の行事での祭りや、お店屋さん準備、飼育栽培の造形、伝承遊び、生活経験とつながる造形遊び、片づけなどが共通する。

以上、小学校単元との関連を調べ、教科によっては間接的には6年生までの系統的学習の基礎を培う遊び、直接的経験とつながる単元を見いだせた。

小学校児童の学びが自らの経験とつながり、「分かる!」「おもしろい!」と実感できる学びにするためには、幼児期の身体感覚経験や、語り合い確かめる時間が必要である。校種を超えて互いの理解を促すことでのみ、理解は深まる。幼児の経験理解が小学校教員と保育者で共有されることで、小学校での学習が幼児期の経験的学びから発展していくことが可視化され、ひいては児童が「分かる」ことの実感を深めることにつながると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

1. 論文発表 丁子 かおる「幼稚園における幼児が絵や彫刻を楽しむ鑑賞教育の実践的研究 幼児の言葉と表現を育む環境として」『大学教員と幼稚園教諭との連携による保育の創造 言葉で人とつながり合う幼児を育てる』査読無, 福岡教育大学幼児教育研究部報告書. 2013.3, pp.15-22.

2. 論文発表 丁子 かおる, フロントライン教育研究 「造形活動における幼小接続へ向けての現状調査 : 材料用具の経験カリキュラムについて」『初等教育資料 -(887)』査読無 pp. 112-115, 2012

3. 論文発表 丁子 かおる, 「保育現場における材料用具の経験についての調査研究 美術教育の幼小接続へ向けてー」『美術教育学 33』査読有 , pp.287-300, 2012

〔学会発表〕(計7件)

1. 口頭発表 山田 伸之, 丁子 かおる, 日本保育学会 大阪総合保育大学「地震防災保育実践からみえてきた園とともに作る視点 2014.5.18

2. 口頭発表 丁子 かおる, 美術科教育学会 奈良大会 奈良教育大学「乳幼児造形から小学校教育への接続と展開 生活と学びの土台をつくる造形の遊び」2014.3.29

3. 口頭発表 丁子 かおる, 美術科教育学会 島根大会 島根大学「幼稚園の年中児と年長児における言葉の比較と援助 幼児が絵画をみて楽しむ鑑賞教育の実践事例を通してー」2013.3.29

4. ポスター発表 丁子 かおる, 大学美術教育学会 大分大学「幼稚園における鑑賞教育の実践的研究 - 幼児の言葉と表現を育む環境としての絵画鑑賞 -」2012.10.21

5. 口頭発表 山田 伸之, 丁子 かおる, 日本保育学会 玉川学園大学「乳幼児からの体験型地震防災保育プログラムの開発」2012.5.5

6. 口頭発表 丁子 かおる, 美術科教育学会 新潟大会 新潟大学「保育現場における材料用具の経験についての調査研究 美術教育の幼小接続へ向けてー」2012.3.28

7. Kaoru CHOJI "Study on human environment through Playful Art in Japan -Analysis of six-year-old from 0 practices- " Pacific Early Childhood Education Research Association 12th Annual Conference, 神戸国際会議場, 2011.8.1

〔図書〕(計2件)

1. 磯部 錦司編著, 丁子 かおる他 10名. 建帛社, 『造形表現・図画工作』2014.4.15 pp.5-7, pp.76-77, p.108, pp.144-145, p.117, p.152, p.154, p.166, p.168, pp.172-17

2. 丁子 かおる, 4章1担当「その他の保育システムにおける保育内容 1. 幼保一体化の流れ」中西 利恵、三宅 茂夫編著他6名, あいり出版, 『保育内容総論 保育所・幼稚園の保育内容の総合的理解と実践の探究』2013. pp.61-67.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

様 式 C - 1 9、F - 1 9、Z - 1 9、C K - 1 9 (共 通)

取得状況 (計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丁子 かおる (CHOJI, Kaoru)

和歌山大学 教育学部 准教授

研究者番号 80369694